

持続可能な社会を創造しようとする子どもを育てる社会科学習指導 —情報の収集・整理を生かした検討活動を通して—

Social-studies educational guidance which brings up the child
who is going to create the society which can continue
— Let the examination activities which employed collection and
arrangement of information efficiently pass. —

高 口 直 喜

Naoki KOGUCHI

(福岡教育大学附属久留米小学校)

(平成25年9月30日受理)

要 約

現代社会においては、めまぐるしく変化する社会に対応することが求められている。また、社会科教育の動向として、今日の目指す社会は持続可能な社会であり、その社会の中における見方や考え方の育成が一層求められている。しかし、社会科の学習において、資料からの情報の取り出し、整理、組み合わせ、整理した情報を根拠とした検討活動の仕組みが明らかになっていなかったために、情報を考えに生かしている子と生かしていない子が見られた。そのことから、情報の収集・整理を生かした検討活動の充実を図っていく。

そこで、本研究は、持続可能な社会を創造しようとする子どもを育成するための検討活動を充実する際の方向性を得ることを目指して実践的研究を行うものである。

キーワード：持続可能な社会、情報の収集、情報の整理、見方や考え方、活用

I. 主題設定の理由

1. 社会の要請から

中央教育審議会では、平成23年1月31日の第74回総会において、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)が取りまとめられた。そこでは、グローバル化や知識基盤社会の到来、情報化社会の進展、就業構造・雇用慣行の変化等による教育、雇用・労働を巡る課題が生じてきている。また、そのためには各界が相互理解を深め、各々の役割を発揮し、積極的に連携・協力して、様々なキャリア教育・職業教育を推進し、この国の人々に「未来を見据え、希望を持って人生を歩んでいくための力」を与えることを期待していると記されている。このことから、子どもたちに自分たちの将来の社会を見通し、社会の一員として貢献することができる資質や能力の育成を求められていると考えることができる。

また、平成23年度から実施されている小学校指導要領においては、社会科の改善の基本方針の中で「・・・我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する・・・」(学習指導要領解説 社会編より一

部抜粋)ここで目指している社会は、持続可能な社会であることが分かる。このことから、子どもたちは現在の社会を理解するばかりでなく、将来的にも今の社会が持続、発展する社会をその構成する一員としての自覚を持って、現在の社会とつなげながら追究していくことが求められていると考えることができる。

以上のことから、持続可能な社会を創造しようとする子どもを育てることは、「将来を見据え、人生を歩んでいく力」や現在と将来の社会を継続的、発展的に追究していくこととなり、本研究は意義深いと考えることができる。

2. これまでの研究の歩みと子どもの実態から

平成23年度、社会部の研究では、「考えをつくる言語活動」と「考えを高める言語活動」という資料を活用した言語活動の充実に取り組んだ。そのことにより、事実を基に問題を解決しようとする学び方は身に付いてきている。しかし、資料からの情報の取り出し方、整理の仕方、組み合わせ方、整理した情報を根拠とした検討活動の仕組みが明らかになっていなかったために、情報を考えに生かしている子と生かしていない子に格差が見られた。また、これからの社会の在り方を考える場合、理想像のみで話し合い、心情的な部分が

中心となってしまうことがあった。そこで、これからの社会の在り方を考える場合でも根拠を明確にすることによって、他者との議論の視点がはっきりし、そのことにより現実的な社会の在り方についての考えをつくることができるようになると思える。

以上のことから、課題は2点あると思える。

- ① 資料の中から取り出した情報を生かした交流を行うこと
- ② 将来の社会を見る場合の考えの根拠を明確にした交流活動を行うこと

よって、持続可能な社会を創造しようとするために、情報の収集・整理を生かした検討活動の仕組みを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ. 主題の意味

1. 主題の意味

(1) 持続可能な社会とは

将来の方向性を明確にし、人と環境や人と人が共生したり、物を循環したりして、継続的に発展的に続けることができるような人々の相互作用の営みである。

「共生」とは、健全な生態系を維持、回復し、自然と人間の互いにとってよい関わりを人がすることである。また、人々が生活していく上で、人々が価値ある関係として相互に関わり合って生活することである。

「循環」とは、環境への負荷をできる限り少なくし、ものを何度も繰り返し使えるようにすることを基調とすることを実現することである。また、持続可能な社会については、方向性、継続性、発展性の3点からみることとする。(図1)

- ・方向性：経済的、社会的、環境的のいずれかの目的であることが明らかであるか。
- ・継続性：時間軸である過去と現在のつながりで見たり、現在と未来、或いは過去、現在、未来をつないで見たりすることができるか。
- ・発展性：質的、量的な高まりを見ることができるか。

わたしたちの現在の課題は、このままでは環境破壊や経済破綻によって、将来の不安があることである。そのことから、持続可能な社会とは、将来的にわたしたちの社会が継続、発展することが望まれている。ま

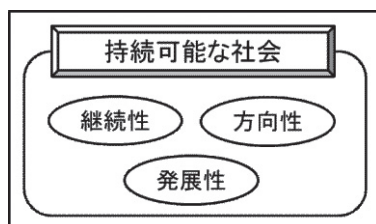


図1 持続可能な社会の視点

た、継続、発展するためには、人々の目的をもった取り組みが必要になってくる。よって、以上の3点から持続可能な社会をみていくことができると考える。

(2) 「創造しようとする」とは

自分なりに考え、判断することである。

「創造」とは、それまでなかったものを初めてつくり出すこと。(「大辞泉」より) 新しいものを自分の考えや技術などで初めてつくりだすこと。(「日本国語大辞典」より) とある。そこで、新しいものをつくり出すためには、自分なりの考えが必要であり、さらには自分の考えを基に判断することで確固たる自分の考えが構築される。また、持続可能な社会は即座に創りあげることではできない。よって理想とする姿を明確にすることによって、人々の関わりが見えてくる。つまり、持続可能な将来の社会の姿を考え、判断することは、その社会を創りあげようとする一端を担うことになると思える。

(3) 「持続可能な社会を創造しようとする」とは

これからの方向性を明確にし、「人と環境」や「人と人」が共生したり、物を循環したりして、継続的に発展的に人々の相互作用の営みができるような在り方について、社会的事象の意味を捉えた内容や見方や考え方を活用しながら、自主的、主体的に考え判断することである。

持続可能な社会を創造するには「働きかける」段階、「共有する」段階、「実感する」段階があると思える。子どもたちにとって何も無い状態から、社会の在り方を考え、判断することはできない。

そこで、社会を正しく認識することと、正しく認識した社会を基に自分なりに社会を考えるということが必要であると思える。そのためには、社会認識を形成する過程を踏まえる。まず、社会的事象に働きかけ、事実を明らかにする(事実認識)「働きかける」段階。次に、知り得た事実を基に、子どもたち相互が現在の社会の仕組みや働きを明らかにし(関係認識)、子どもたちが現在の社会を納得する「社会的事象の意味を共有する」段階。そして、追究して明らかにした社会と将来や過去の社会をつなげて自分なりの社会を考え、社会的事象の理解を深め、社会を形成する一員として自覚する(主体認識)「社会的事象を実感する」段階の各段階があると思える。(図2)

「働きかける」段階：自然的側面(自然環境に関わること)や社会的側面(人々の行為や行為の結果として生じること)、歴史的側面(時間軸から事象を見ること)から見ることで、事実が明らかになる。

「共有する」段階：立場からみることで人々の関係が明らかになったり、人々の関係の結果を社会への影

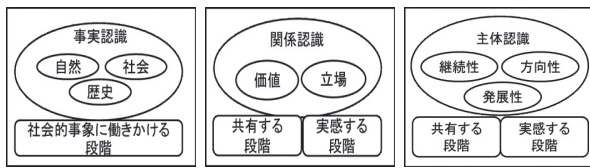


図2 持続可能な社会を創造する各段階

響という価値から考えることで社会的な事象の意味が明らかになったりする。

「実感する」段階：方向性を明確にすることで、目的を持って社会をみることができるようになる。また、持続可能な社会であるためには、社会は時代と共に変化しているため、発展性（改善していくこと、よりよく変化していくこと）としてみることが将来的な社会が具体化される。さらには、社会は過去の財産が基盤となって築き上げられてきている。よって継続性（過去の中でのつながり、過去・現在・未来のつながりという時間軸）でみること、よりよい社会の在り方が明確になってくる。

(4) 「持続可能な社会を創造しようとする子ども」とは

これからの共生や循環という人々の営みの在り方について、社会的な事象の意味を捉えた内容や見方や考え方を活用しながら、方向性、継続性、発展性という視点から考え、判断することができる子どものことである。

第5学年単元「公害をふせぐ」で説明することとする。（図3）

まず、取り組みの事実や環境への影響、公害発生から現在の環境を守る取り組みを時間軸で見ると。そのことで公害の大変な状況や克服する事実を捉える。

次に、工場や市役所、市民の立場から見ることによって協力する関係とその関係によって健康な生活が守られているという価値を捉える。

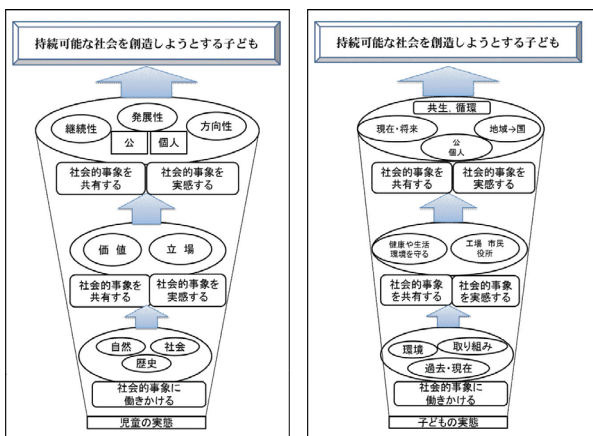


図3 子ども像と5年生「公害をふせぐ」における子どもの姿

そして、克服してきた過去と目指している環境都市への取り組みという現在までの時間軸を基に将来の姿をみたり、人々の生活を守るという取り組みという方向性を基にみたり、エネルギー転換や3Rという発展という視点からみること、北九州市の循環型社会のよさと今後の在り方を考え判断する。

持続可能な社会を創造しようとする子どもの資質や能力は以下のように捉える。

- 出会った社会的な事象に対して興味・関心を持ち様々な視点から事象を見たり考えたりしながら追究活動をし、社会の一員としての自覚を持つ子ども（関心・意欲・態度）
- 社会的な事象や将来の社会を様々な視点から見たり考えたりすることで、事実や考えを関係づけたり、その影響を考えたりすると共に、適切に表現する子ども（思考・判断・表現）
- 社会的な事象の事実を目的に応じて観察・調査して収集したり、観点を持って整理する子ども（技能）
- 社会的な事象を多面的にみること、社会的な事象の意味を捉える子ども（知識・理解）

2. 副主題の意味

持続可能な社会を創造するためには、情報を基に根拠を明らかにする事で、将来の具体的な姿が見えてくる。よって情報をどのように活用するかが、空論ではなく現実的な持続可能な社会の在り方を考えることができるポイントとなると考える。

(1) 情報の収集・整理とは

問題解決に必要な具体的な事実や一般化した知識、学習して身に付けている社会的な見方や考え方、学び方を集めたり、取捨選択したり、組み合わせたり、表現物に表したりすることである。

ここでいう情報とは、問題解決に必要な具体的な事実と一般化した知識、身に付けている見方や考え方、学び方のことである。（図4）

収集するのは、問題解決のための具体的な事実や、これまでに学習して一般化した知識（既知）である。

整理するのは、観察・調査して得られた多様な事実

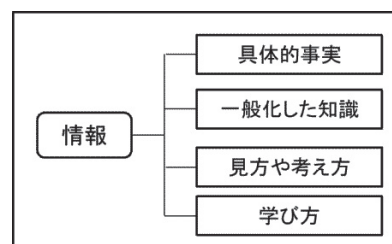


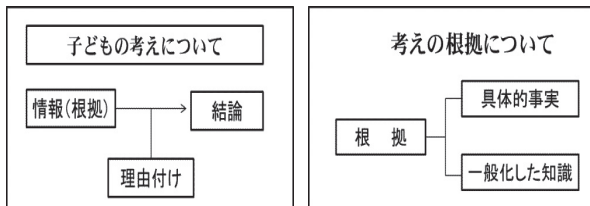
図4 情報について

である。また、「整理する」とはその事実をグラフや表、年表、地図（絵地図を含む）として事実をある観点を基に表現することである。

(2) 情報の収集・整理を生かすとは

集めた情報を考えの根拠としたり、分かりやすく表した事実を説明に使うことである。

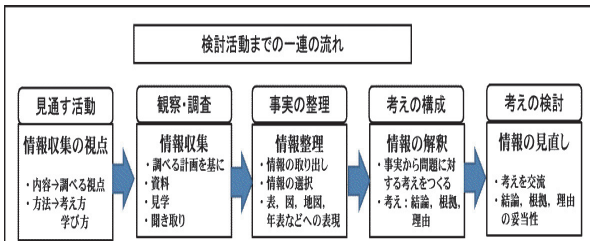
考えの根拠となるのは、情報の中の具体的事実と一般化した知識である。また表現物は、説明の資料の一部として検討活動に活用できる。



(3) 情報の収集・整理を生かした検討活動

身に付けている社会的な見方や考え方、学び方を駆使して、観察・調査して知り得た事実や一般化した知識を根拠とする考えを、他者と吟味して課題を解決する活動である。

情報の収集・整理と検討活動は、子どもたちの問題意識のもとに一連の活動として行われなければならない。その一連の流れは以下になると考える。



情報の収集・整理を生かした検討活動Ⅰの目的、内容、方法は次のように考える。

	情報の収集・整理を生かした検討活動Ⅰ
目的	考えの多様性に気づく
内容	自分の考えの説明と考えの共有化とともに、話し合いを焦点化する。
方法	①説明：資料の事実を根拠として ※互いの考えを理解し合う ※考えの根拠を指し示し、明確にする ②比較：共通点や差異点から考えを整理し、それぞれの事実や考えを比較 ・考えの分類（共通点） ・話し合いの焦点化（共通点、差異点） ※話し合いの焦点化がわかる板書

ここでは、自分の考えの根拠を明確にすることである。そのためには根拠となる資料から事実を取り出して他者を説得することが大切である。また、話し合い

を焦点化するためには、共通点や差異点で整理していく。その差異点として出てきた内容を新たな争点として話し合いを行わせる。

情報の収集・整理を生かした検討活動Ⅱの目的、内容、方法は次のように考える。

	情報の収集・整理を生かした検討活動Ⅱ
目的	社会的事実の仕組みや働きを新たな視点から捉え直し、社会とのかかわりを深める。
内容	新たな資料や時間軸を広げ、継続性、方向性、発展性という視点から資料の事実を考え、社会の仕組みや働きを実感する。
方法	①比較：焦点化された考えの比較 ・事実をみる視点の付加や修正、転換 ※現在と将来における時間のつながりの視点から事実を見る ②考えの関係づけ ・事実を公や個の視点から継続性、発展性、方向性を考える。 ※考えを関係付けられるような資料（公と個から事実をみることが出来る） ③社会的事実の仕組みや働きを捉え、実感する。

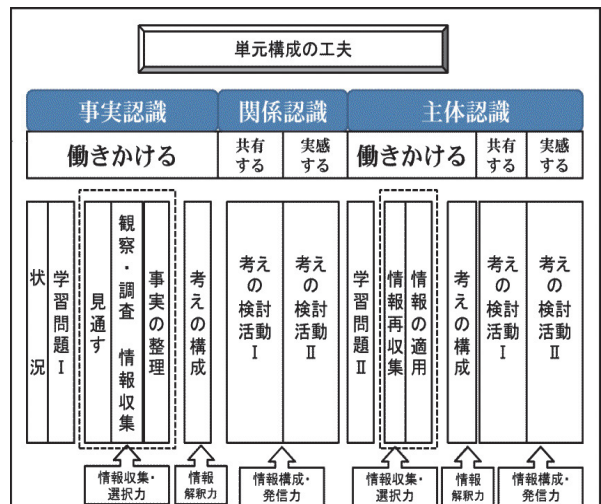
Ⅲ. 具体的構想

1. 社会科の特質に応じた単元構成、学習過程の具体化

(1) 単元構成について

社会科の学習は、問題解決的な学習を基本とする。そこで、情報収集・選択、情報解釈、情報構力・発信力を順に行い、1サイクルとして繰り返し行う。単元においては、単元前半で社会的事実の意味を捉え、単元後半で社会のあり方について考えるという構成をする。つまり情報編集力が2回繰り返されることとなる。単元後半においては、前半で培った能力を活用できるようにする。

そのように、活用することができるようにすることで、内容の理解を深めるとともに、情報編集力を高めることができるようになる。と考える。



(2) 学習過程について

段階	学習活動	情報の活用
つかむ	○ズレから、めあてについて話し合う。	・社会的事象という情報の提示
見通す	○解決の視点を内容と方法から考える。	・情報活用の視点の明確化
つくる	○資料の事実と既知を根拠として考えをつくる。	・事実の収集、選択、組み合わせ
高める	○情報の追加や見方を付加・修正して考え直す。	・資料の追加や見方の付加・修正
生かす	○新たな事象について、事象のズレを予想する。	・新たな社会的事象の提示

2. 問題設定の工夫について

(教材の選定・開発の視点と手順の明確化)

(1) 問題設定の工夫

ズレがある事象や考えの提示をする。ズレとは、事象間のズレ、事象と子どもの考えのズレ、子ども間の考えのズレと考える。納得できる事象から予想外の事象という内容や順序を工夫する。

(2) 教材の選定・開発の視点について

- ①教材1：社会的事象の意味を明らかにするための教材

本質性：社会的事象の意味をとらえることができるか。
密着性：子どもたちにとって身近で、問題解決するための切実感があるか。
多面性：様々な側面や複数の立場から追究活動することができるか。

- ②教材2：学習問題Ⅱにおける社会的論争問題、或いは歴史的論争問題を取り上げ、意思決定することができる教材

発展性：社会的事象の意味を追究した見方や考え方を応用することができるか。
選択性：子どもたちが、複数のの中から自分の立場を選び、意思決定ができるか。

3. 学習過程終末での活動の具体化と系統性

(1) 学習過程終末段階における評価活動

- 学習で行った見方や考え方を、学習して明らかにした内容と照らし合わせて振り返る。
- 自分の考えのよさと友達考えのよさの視点から振り返る。

(2) 単元後半における発展的な活動

学習問題2として、社会的論争問題や歴史的論争問題を取り上げることで、既知や見方や考え方、学び方が活用できるようにする。内容を実感として捉え、社

会の一員としての自覚を持たせる。

4. 教師の支援の具体化

(1) 質及び量を実感させる工夫

表現物を充実させるためには、質や量を実感させることが必要である。実感させることにより、事実と事実の関係について考えたり、資料の解釈へと発展したりすると考える。そこで、質の実感を直接的、間接的体験、量の実感を具体物での換算や数値や身近なものへの置き換えをする。

質を実感させる	量を実感させる
本物にふれる 見学 体験する活動	身近なものへの置き換え 具体物で換算

(2) 既存資料と自作資料の活用

- 既存資料：調査・観察や考えの視点を付加・修正するために活用
- 自作資料：考えを構成したり、説明したりするために活用

(3) 学習ノートの工夫

- 学習ノートは図5のように、関係的に表現し、視覚化する。
- 結論と根拠、理由付けの明確化：情報構成力、他者へ説明する情報発信力
- 考えの過程の視覚化：情報の活用の有効性について振り返る情報編集力

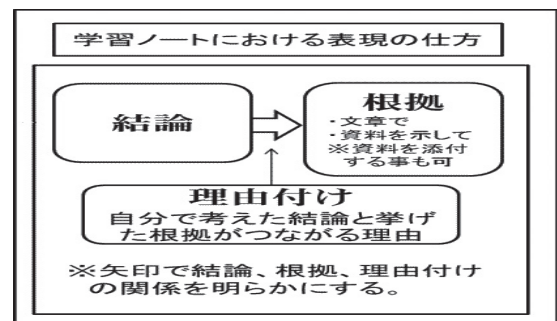


図5 学習ノートへの表現の仕方

以上のように、子どもの考えを表現させることで、検討活動において、他者へ何をどのように伝えたらよいのか明確にさせ、検討活動を旺盛にする。

Ⅳ. 研究の実践

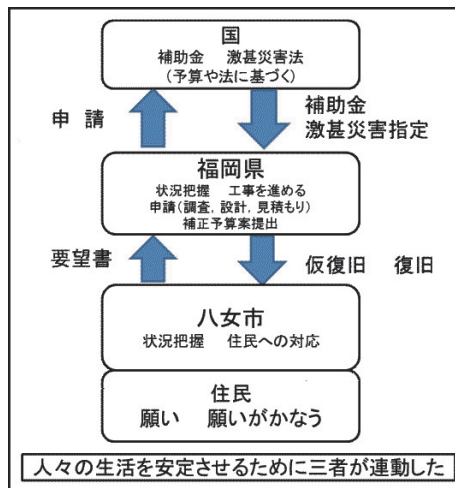
1. 第6学年単元

身近な暮らしと政治

～九州北部豪雨災害における八女市の取組～

2. 本単元の考え方

ここでは、平成24年7月の豪雨災害における八女市、福岡県、国の政治の働きを取り上げ、住民の願いの基、市と県、国が連動することで住民の生活を安定させたという政治の働きを見出すことができる。



3. 単元の目標

- 1 八女地区における災害に関心を持ち、八女市と福岡県、国の災害復旧の取り組みについて意欲的に追究し、身近な日常生活における政治の働きへの関心へと高めることができるようにする。
- 2 八女地方の災害復旧の取り組みについて、八女市の井上さんや、県、国の立場から、市民の願いを基に地方団体が連動して解決するという関係について考え、人々の生活の安定のためであることを判断するとともに、自分の考えを書き表したり、説明したりすることができるようにする。
- 3 八女地方の道路や家屋の被害状況を統計や写真資料から読み取ったり、災害発生から道路の復旧までの市と県と国の取り組み表から、互いの関係を解釈したりすることができるようにする。
- 4 災害という緊急事態が発生した場合には、市民が緊急事態を回避したいという願いの基、それをかなえるために県が復旧作業を行うとともに、国も法を基に補助金を出し援助するという連動した関係となって、人々が安心して生活ができるようにしていることを理解できるようにする。

4. 学習の流れ

<事象との出会い>



【災害時の様子】



【23日以降の様子】

初めに事象との出会いでは、子どもたちに関心を持たせ、追究意欲をかき立てられるように事象のズレを提示した。市内で災害箇所は約 2400 箇所にもものぼる

が、23 日間を通ることができるようになったということから、子どもたちは、「そのような短期間でなぜ通ることができるようになったのか」という疑問を持っていた。そこで、学習問題Ⅰを以下のように設定した。その学習問題を基に、追究していった。

<学習問題Ⅰ>

なぜ、23 日間で県道 52 号線が通れるようになったのだろう。

<働きかける段階>

子どもたちは、八女市のことであるため、八女市役所の方の取り組みを調べていった。しかし、その中で、県や国も関わっていることに気付いていった。

また、それらの取り組みを時間の経過に従って調べていった。よって、ここでの自然、社会、歴史という側面から子どもたちは次のような事実を捉えていった。

○自然：災害の箇所の地理的な側面から

- ・市街地から山間部へ入ったところで、道路の片側は山の斜面であり、もう一方は川であること
- ・八女市の中心部と星野村をつなぐライフラインが寸断されていること

○社会：災害時の人々の取り組みから

- ・市役所の災害箇所への復旧作業と申請
- ・県土木事務所による復旧作業と国への申請
- ・国からの激甚災害の指定と補助金が確定した場合の流れ

○歴史：災害への取り組みを時系列的に見ていく

- ・人々の行為を時系列的に見て、復旧作業や申請、補助金の決定等の流れ

以上の事実を基に、自分の考えを構成した。そこで、子どもたちは、三者（市、県、国）のつながりがあると考え、そのつながりによって道路を通ることができるようになったと考えていた。しかし、三者のつながりという点では、国と八女市が直接つながるか、間接的につながるかという違いが生じていた。そこで、その違いに焦点を当て、共有する段階において話し合うこととした。しかし子どもたちの意識としては、直接的、間接的つながりではなく、つながっているか、つながっていないかという考えの違いであった。

<共有する段階>

子どもたちは、事実を調べたことを基に自分の考えを以下の資料の中から事実を取り出し、根拠を述べていった。

県道52号線の復旧への取組

日にち	八女市	福岡県	国
取組の基本	県の地域防災計画に基づく 八女市の地域防災計画	防災基本計画に基づく 福岡県の地域防災計画	災害対策基本法に基づく 防災基本計画
7月14日	2400箇所への避難指示		
7月14日～	災害箇所の調査 県道52号線の寸断確認	市から被害情報を報告 災害箇所の調査、約80箇所通行止め	
	防災会議を喚起。 市役所、県土木課、NTT、NTTドコモ、九電など情報交換や今後の取組について連日話し合う (1週間)		

	市:市内の様々な場所の状況や市民の生活状況 他団体:不通や停電の状況、復旧の進捗	
	土砂の除去やかんぼつした道路などに対する応急処置の作業開始 県道52号線の道路への復旧も行う	
	緊急対策(応急復旧可能か)	
7月20日	県へ要望書提出(全面通行止めの解消、本格的工事完了について)	県による市の要望の聴取
7月31日		激甚災害法を基に八女の災害を激甚災害に指定する。被災事業は費用の全部を補助、援助を受けるには復旧の設計を国へ申請し、国の査定が必要
8月6日		県道板復旧(片側通行)
8月7日	八女市臨時議会	
9月上旬		復旧にかかわる案を県議会へ提出 復旧にかかる地質調査、設計 設計(復旧の計画、費用等)を国へ申請
9月18日~ 10月13日		福岡県議会
平成25年度1月		県の申請に対する国の査定

○説明

・つながっているという考え

八女市への補助金は国からくるのであり、八女市も申請書を出している。そして、激甚災害という指定がされている。そのことから、八女市と国はつながっていると考える。説明の際は、資料の中の事実を取り出し、その事実をつなぎながら説明した。

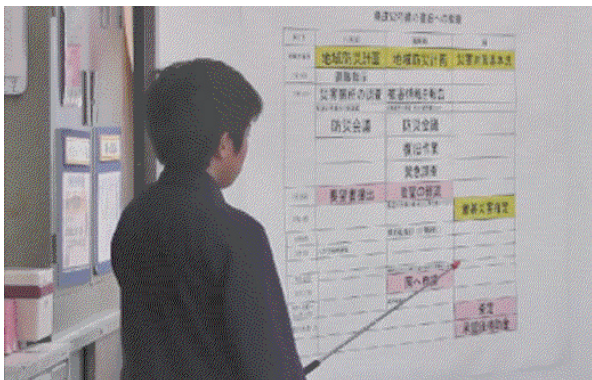


写真1 市と国はつながっていると説明するA児

・つながっていないという考え

最終的には、国から八女市へ補助金があるが、県道は福岡県の道路であり、ここの復旧をしているのは福岡県である。そこで、福岡県が国へ申請を行い、その補助金が県に支払われる流れになっている。八女市は、そのことによって、復旧することができたということ



写真2 市と国はつながっていないと説明するB児

だから、国と八女市は直接つながるのではなく、間接的につながっているのであると考えている。

○比較

子どもたちの互いの考えを共通点と差異点から整理した。まず、共通点としては、間接的、直接的どちらでも国と県と市(市民)はつながっているということであった。次に差異点について検討した。そのことから、「直接的か」「間接的か」という焦点化された。よって、焦点化された論点から検討活動が改めて行われていった。

<実感する段階>

○比較

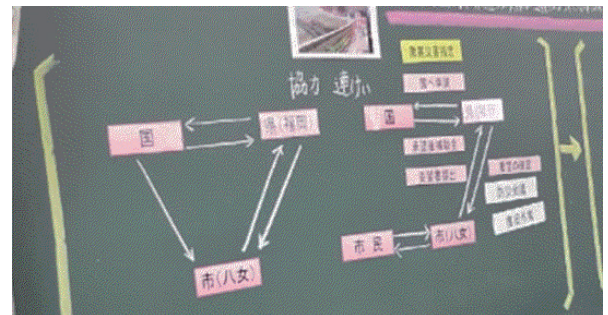


写真3 つながりの直接的、間接的を検討し書き表した板書

○関係付け



写真4 焦点化された視点で話し合うペアの子どもたち

ここで、つながりが直接的か間接的かを改めて見直すペアでの話し合い活動を設定した。

ペアの話し合いの結果、申請書と補助金の流れに視点が向けられた。申請書は市から県へ出され、福岡県は八女市に対して補助金を決定した。また、福岡県は国へ県道に関する申請をして、補助金が下りるようにした。そのことを、もう一度関係図で見直す活動を行い、仕組みを整理した。

○社会的事象の仕組みや働きを捉え、実感する

子どもたちの考えた市民、市と県と国の関係を働きから見ることで、ここまでして行うことを実感として捉えられるようにした。

そこで、図6の資料を提示しながら「11月1日現在まだ開通していない道路があるのに、なぜ県道52



写真5 関係を見直し、図に表す子ども

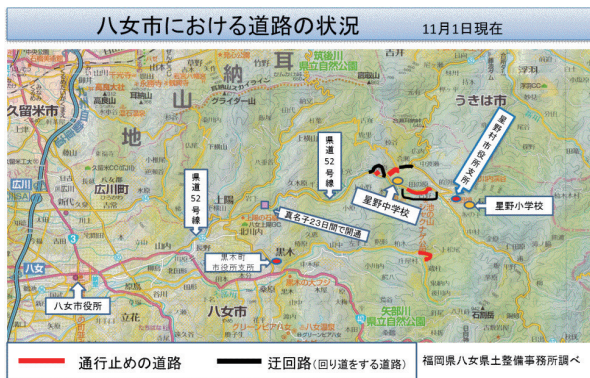


図6 道路の復旧状況を示した地図資料

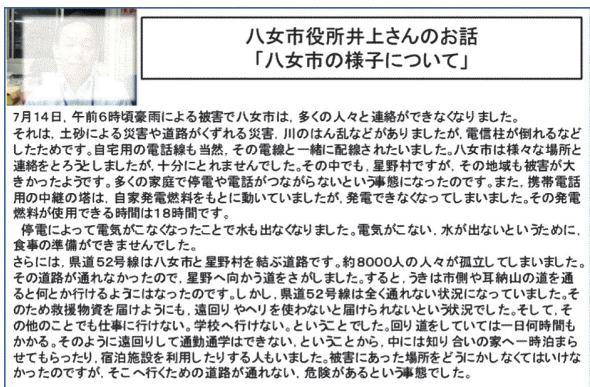


図7 八女市役所の方のお話の資料

号線の真名子付近は23日間を通ることができるようにしたのか」という揺さぶり発問を行った。

子どもたちからは個人が困っていることや多くの人が困っていることから、復旧の順番があるのではないのかという考えが出されてた。つまり、公と個人という視点から働きを見ていたのである。

そこで、八女市役所の井上さんのお話(図7)を提示した。

このことから、「それなら他のところもだけど、ここは真っ先に開通させるべきだ」という県道52号線の真名子付近の開通を、星野村の人々や八女市の人々の生活に大きく影響することとつないで考え、市民のことを考えて政治が行われていることを実感できた。

学習問題Ⅰを解決した後に、県からの補正予算の額を県の年間予算を基に予想させた。その際、約160億

円であることを提示した。すると子どもたちは驚き、そのようなお金を出すことができるのかという疑問が出てきた。

<学習問題Ⅱ>

災害復旧のための多額の費用をなぜ準備することができるのだろうか。

<働きかける段階>

- ・国会、議会による予算や補正予算が決まるまで
- ・税金の使われたかについて

<共有する・実感する段階>

わたしたちの税金の一部から、予算や補正予算を組み、国や県、市の中の事業に使われていることに気付いていった。そこで、「税金はどんなことのために使われているのですか」と発問をした。

子どもたちは、共通点に目を向け国民生活のために使われていると考えていた。するとC児から「だから、税金を払わないといけなの。税金は国が続いていくためには必要だな。」という発言があった。このことから、時間軸を将来へつなげて国の政治の働きを実感することができたと考える。

V. 全体考察

情報の収集・整理する検討活動を段階的に行ったことで、子どもたちは社会的事象の意味を明らかにするばかりでなく、実感として捉えることができた。また、時間軸を現在と将来をつなげて考えるような事象を提示したことで、現在の社会の仕組み自体が、継続的な社会となるという考えまで高めることができた。

それは、学習問題Ⅰにおいて、仕組み捉えた後に更に視点を変えて見直させ実感することができたこと。また、学習問題Ⅱでは時間軸を広げて考えさせたことが有効に働いた。

これからは、見方や考え方がどのように活用されながら、次への知識獲得へとつながるのかをより具体的にしていきたい。そのことは、見方や考え方の活用のスパイラルを生じさせることができると考える。そのような視点から今後も持続可能な社会を創造しようとする子どもを目指して研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- 文部科学省、『小学校学習指導要領解説社会編』、2008年、東洋館出版社。
- 附属久留米小著書、『基本の授業・応用の授業』、2006年、明治図書
- 濱嶋朗、竹内郁郎、石川晃弘編、『社会学小辞典』、1977年、有斐閣
- 安野功、『社会科授業力向上5つの戦略』、2006年、東洋館出版
- 附属久留米小平成23年度研究紀要